『枕草子』の複合動詞語彙
―用語選択の意識から見た―

岡　野　幸　夫

Yukio OKANO：
The Combined Verbs of ‘Makura no Soshi’

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要　第74号　抜刷

2017年 1 月

『枕草子』の複合動詞語彙―用語選択の意識から見た―

岡　野　幸　夫[1]

Yukio OKANO：The Combined Verbs of ‘Makura no Soshi’

平安時代十一世紀初頭に成立した仮名随筆作品である『枕草子』に見られる複合動詞語彙について、数量的観点から概観した結果、『枕草子』は日記文学としての性格も色濃く持つが、とくに他の日記文学作品との語彙の共通度が高いわけではないこと、また、女性作者による平安和文作品の複合動詞語彙は均質性が高く、文学ジャンルによる違いを分析するには、さらに精密な分析の観点や手法を必要とする、という見通しを得た。また、「作者による用語選択の意識」という観点から分析した結果、卑近な日常語を避ける、明快な表現を目指す、という理由で物語作品では用いられない複合動詞が『枕草子』には用いられている、という仮説を得た。

キーワード：複合動詞　枕草子　用語選択の意識

一、はじめに

複合動詞は、動詞の連用形に別の動詞が下接して形成されるもので、単独の動詞では表現できない複雑微妙な動作を表す形式である。どのような動詞を組み合わせ、どのような動作を表すか、作品や時代によって変化が認められることが多くの研究により明らかにされ、日本語の歴史的変化の研究対象として重視される。また近年は、外国語との比較対照を通して言語学的にも注目され、多くの成果が挙げられている(注一)。

『枕草子』は文学ジャンルとしては「随筆」とされるが、同作品が成立した十一世紀初頭はもちろん、鎌倉時代に『方丈記』『徒然草』などの作品が成立するまで、仮名で書かれた随筆作品は他に類を見ない。そのような『枕草子』という作品に用いられる複合動詞にはどのようなものがあり、同時代の他の作品と比較してどのような特徴があるのかを明らかにしたいと考える。これにより、複合動詞語彙の史的研究、および和文体の史的研究に資することを期す。

以上の問題意識のもと、本稿では『枕草子』の複合動詞語彙を分析し、その特徴を明らかにすることと、「作者による用語選択の意識」という観点から、注目すべき複合動詞について分析する。

『枕草子』の伝本は、雑纂形態の「能因本」「三巻本」と類纂形態の「前田本」「堺本」の四系統に大別されるが、本稿では作者の原著の形態に最も近いと評価

1　鳥取短期大学国際文化交流学科

される「三巻本」系統の伝本を対象とする。

また、ほぼ同時代に成立したとされる『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『源氏物語』を比較の対象とする。作者が女性であることが判明している同時代の作品、ということで選定した(注二)。

二、『枕草子』の複合動詞語彙の量的分析

二・一　度数分布

右の五作品について、索引を用いて複合動詞を抜き出し、語彙表を作成した(注三)。その際、以下の語は語構成から見れば複合動詞であるが、すでに一語化しているものとみなし、複合動詞としてはカウントしなかった。

うけたまはる、おはします、おぼしめす、かかぐ（掻上）、きこしめす、ささぐ（差上）、さしる（差入・下二）、しろしめす、つかうまつる、とうづ（取出）、まうのぼる、まかづ（罷出）、もたぐ（持上）

「かい―」「つい―」など、前項が音便形になっているもの

右を除き、得られた複合動詞は五作品全体で四五二二語（異なり）であった。〈表1〉に、作品ごとの度数分布を示す。参考として、各作品の規模を示すため、作品全体の語数（延べ、異なり）と、動詞の語数（異なり）も併せて示す。

まず、作品の言語量（延べ語数）は、大きい順に

源氏物語　枕草子　蜻蛉日記　紫式部日記　和泉式部日記

であることが分かる。『枕草子』は五作品中第二位ではあるが、延べ語数では『源氏物語』の六分の一以下、異なり語数でも半分以下の大きさでしかない。『源氏物語』の突出した巨大さがよく分かる。

そして、複合動詞語彙の大きさ（「合計」欄）は、作品の言語量に比例していることが分かる。また、複合動詞語彙が動詞語彙に占める割合も、作品の言語量に比例する。

次に、度数について検討する。各作品で一回だけ用いられる複合動詞の割合は、『枕草子』で693語（69・6％）で、『蜻蛉日記』（69・4％）とほぼ等しい。これは作品の言語量に反比例し、言語量が大きくなるほど割合が下がる。最も大きな『源氏物語』では53・3％、最も小さい『和泉式部日記』は79・0％である。逆に、各作品で十回以上用いられる複合動詞の割合は、『源氏物語』が最も高く9・2％、『枕草子』は1・8％である。また、若干の出入りはあるものの、度数が増えるにつれて各度数に属する複合動詞の数は減っていく。

度数分布から分かるのは、作品の言語量が大きくなるほど語彙の幅が広がり（「異語数」欄が増え）、頻出する複合動詞の種類が増える（度数「十回以上」の

表1．度数分布表　　単位：語

	蜻蛉	和泉	紫	源氏	枕
1回	498	132	306	1,927	693
2回	109	21	57	574	156
3回	42	8	17	228	52
4回	24	0	6	188	31
5回	12	2	3	123	22
6回	11	2	2	92	12
7回	7	2	2	62	2
8回	2	0	1	47	4
9回	3	0	0	40	5
10回以上	10	0	0	334	18
合計	718	167	394	3,615	995
（作品全体の）					
異語数	3,599	1,704	2,468	11,416	5,246
うち動詞	1,375	436	837	5,091	1,818
延語数	22,400	5,133	8,736	207,788	32,904

※異語数、延語数、動詞は『日本古典対照分類語彙表』によるただし「和泉式部日記」は『平安日記文学総合語彙索引』付録の電子データにより岡野が集計

異語数、延語数は自立語のみを対象にカウントした数値

※５文献全体の複合動詞語彙（異なり）は4,522語

語数が増える）、ということである。これには文学ジャンル（物語、日記、随筆）による違いは見出せなかった。

二・二　語彙の重なり

ここでは、作品ごとの複合動詞語彙の重なりがどのようになっているかについて検討する。

〈表２〉に二作品間の重なりを示す。「％」欄は、その作品の合計に対する百分率である。五作品中、極端に言語量の多い『源氏物語』に呑み込まれている感があるが、作品の言語量が多いほど、語彙の重なりが大きくなっている。『枕草子』について見ると、その複合動詞語彙のうち、『源氏物語』と共通するのは517語（52・０％）である。以下、言語量の大きい順に『蜻蛉日記』19・８％、『紫式部日記』14・２％、『和泉式部日記』６・６％である。『枕草子』の文章は、長短三百以上の章段から成り、それらは「類聚的章段」「日記的章段」「随想的章段」の三つに大別され、日記文学としての性格も色濃く持つものであるが、とくに『蜻蛉日記』や『紫式部日記』といった日記文学作品との共通度が高いわけではないことが明らかになった。

次に、〈表３〉に五作品全体における重なりを示し、〈表４〉に作品ごとの他作品との重なりを示す。〈表４〉について具体的に説明すると、例えば『枕草子』では、『枕草子』を含む五作品すべてに共通して用いられる複合動詞は23語あり、『枕草子』を含む四作品に共通するのは70語あり…というようである。

〈表３〉は、明らかに『源氏物語』の影響を受けている。他の作品に比して突出して言語量の多い『源氏物語』の様相が、そのまま全体の様相となって表れている。五作品すべてに共通する複合動詞が23語しかないのは少ないようであるが、これは言語量の小さい『和泉式部日記』の影響である。母集団の元となる作品数を増やすほど、すべてに共通するものが減少するのは当然であり、また、言語量の小さい作品が含まれると、それがボトルネックとなってすべてに共通するものは極端に絞り込まれることになる。むしろここで注目すべきは、一作品にのみ用いられる複合動詞の数と、それが全体に占める割合であろう。『枕草子』では441語（44・４％）で、以下『蜻蛉日記』36・９％、『紫式部日記』31・０％、『和泉式部日記』19・２％である。最も割合が高いのは『源氏物語』で、75・３％にも及ぶ。前述の度数分布の検討で、作品の言語量が大きくなるほど異なり語数が増える、と述べたが、複合動詞についても同様で、その作品独自の複合動詞が増えてくることが分かる。

語彙の重なりから分かることは、ここでも作品の言語量が重要な要素としてある、ということであった。また、『枕草子』はとくに日記文学作品と共通度が高いわけではないことも明らかになった。

表２．重なり表（２作品間）　　単位：語

	蜻蛉	%	和泉	%	紫	%	源氏	%	枕	%
蜻蛉	—	—	69	41.3%	108	27.4%	420	11.6%	197	19.8%
和泉	69	9.6%	—	—	44	11.2%	128	3.5%	66	6.6%
紫	108	15.0%	44	26.3%	—	—	252	7.0%	141	14.2%
源氏	420	58.5%	128	76.6%	252	64.0%	—	—	517	52.0%
枕	197	27.4%	66	39.5%	141	35.8%	517	14.3%	—	—
合計	718		167		394		3,615		995	

表３．重なり表（５作品）

	語数	%
５作品	23	0.5%
４作品	77	1.7%
３作品	205	4.5%
２作品	634	14.0%
１作品	3,583	79.2%
合　計	4,522	100.0%

表４．重なり表（各作品）

蜻蛉	語数	%
5作品	23	3.2%
4作品	68	9.5%
3作品	136	18.9%
2作品	226	31.5%
1作品	265	36.9%
合　計	718	100.0%

和泉	語数	%
5作品	23	13.8%
4作品	34	20.4%
3作品	34	20.4%
2作品	44	26.3%
1作品	32	19.2%
合　計	167	100.0%

紫	語数	%
5作品	23	5.8%
4作品	59	15.0%
3作品	86	21.8%
2作品	104	26.4%
1作品	122	31.0%
合　計	394	100.0%

源氏	語数	%
5作品	23	0.6%
4作品	77	2.1%
3作品	202	5.6%
2作品	590	16.3%
1作品	2,723	75.3%
合　計	3,615	100.0%

枕	語数	%
5作品	23	2.3%
4作品	70	7.0%
3作品	157	15.8%
2作品	304	30.6%
1作品	441	44.3%
合　計	995	100.0%

表５．各作品の上位10語

蜻蛉	和泉	紫	源氏	枕
16 おもひやる（思遣・四）	8 さしいづ（差出・下二）	8 みしる（見知・四）	315 もてなす（持為・四）	23 いでく（出来・カ変）
15 いだしたつ（出立・下二）	7 おもひたつ（思立・四）	7 うちとく（打解・下二）	242 おもひいづ（思出・下二）	23 もてく（持来・カ変）
14 おもひいづ（思出・下二）	6 おもひいづ（思出・下二）	7 みわたす（見渡・四）	176 おぼしいづ（思出・下二）	20 さしいづ（差出・下二）
13 いでたつ（出立・四）	6 まゐりく（参来・カ変）	6 もてなす（持為・四）	150 うちとく（打解・下二）	18 みつく（見付・下二）
13 みやる（見遣・四）	5 おもひかく（思掛・下二）	6 いでゐる（出居・上一）	131 おもひしる（思知・四）	16 いひいづ（言出・下二）
12 みいだす（見出・四）	5 おもひみだる（思乱・下二）	5 まゐりつどふ（参集・四）	128 いでく（出来・カ変）	16 みいる（見入・下二）
11 いひやる（言遣・四）	3 おもひやる（思遣・四）	5 とりつぐ（取次・四）	118 おもひよる（思寄・四）	13 みしる（見知・四）
11 おもひたつ（思立・四）	3 いでく（出来・カ変）	5 まゐりすう（参据・下二）	111 おもひやる（思遣・四）	13 いひあはす（言合・下二）
10 まゐりく（参来・カ変）	3 あかしくらす（明暮・四）	4 おもひいづ（思出・下二）	98 みしる（見知・四）	12 みやる（見遣・四）
10 みきく（見聞・四）	3 うちふす（打臥・四）	4 おもひしる（思知・四）	95 おしはかる（推量・四）	12 おもひやる（思遣・四）
	3 さしよす（差寄・下二）	4 いでく（出来・カ変）		12 ききつく（聞付・下二）
	3 おぼしいづ（思出・下二）	4 さしいづ（差出・下二）		12 うちおく（打置・四）
	3 おきゐる（起／置居・上一）	4 みやる（見遣・四）		
	3 きます（来座・四）	4 もてまゐる（持参・四）		

※語の左の数値は用例数

表６．五作品に共通する23語

いでく（出来・カ変）	おしはかる（推量・四）	おもひやる（思遣・四）	とりいづ（取出・下二）	もてまゐる（持参・四）
いでゐる（出居・上一）	おもひいづ（思出・下二）	かきつく（書付・下二）	なりゆく（成行・四）	よりく（寄来・カ変）
いりく（入来・カ変）	おもひかく（思掛・下二）	ききつく（聞付・下二）	ひきいる（引入・下二）	ゐざりいづ（膝行出・下二）
うちとく（打解・下二）	おもひしる（思知・四）	さしいづ（差出・下二）	もてく（持来・カ変）	
おしあく（押開・下二）	おもひみだる（思乱・下二）	さしよす（差寄・下二）	もてなす（持為・四）	

二・三　上位語、共通語

〈表５〉に、各作品の上位10語（以下「上位語」と呼ぶ）を一覧し、〈表６〉に、五作品すべてに共通して用いられる23語（以下「共通語」と呼ぶ）を一覧した。〈表５〉では、同数で順位が等しくなるものが複数見られる場合がままあり、必ずしもぴったり10語が一覧されているわけではない。網掛けをした複合動詞は、〈表６〉の共通語に含まれるものである。また、『和泉式部日記』と『源氏物語』に見られる「おぼしいづ（思出）」は、共通語に含まれる「おもひいづ（思出）」に準じて扱う。

〈表５〉を見ると、『枕草子』と『蜻蛉日記』とは、上位語に占める共通語の割合が低いことが注意される。とはいえ、このことから、両作品では複合動詞語彙のばらつきが大きく、独自のものが使われる可能性が高い、と考えるのは早計である。両作品について共通語に含まれない上位語は、平安時代の他の作品にはよく用いられる、ごくありふれたもので、たまたま共通語に含まれなかったに過ぎないものと思われる(注四)。また、共通語に含まれない上位語には「いひ―」「み―」の形式が目立つ。これは共通語にこの形式のものが含まれていないのが原因である。そしてそれは『和泉式部日記』の複合動詞語彙にこの形式のものがあまり見られないのが理由なのである。ここでも作品の言語量の問題が浮上した。いま仮に『和泉式部日記』を外して四作品から抽出すると、共通語は23語から66語に増え、上位語に見られる「いひ―」「み―」の形式のほとんどが共通語に含まれるようになる。『和泉式部日記』がボトルネックになっていることが分かる。

逆に、上位語に共通語が多く含まれる作品は『和泉式部日記』『紫式部日記』『源氏物語』である。けっきょく、言語量が大きい『源氏物語』を中心に回っている、ということになるのだろう。ただ、『紫式部日記』の作者紫式部は、言うまでもなく『源氏物語』の作者でもあり、両作品が似た傾向を示すのは腑に落ちやすい。また、『和泉式部日記』は（注一）でも述べたように、物語としての性格も併せ持っており、その点『源氏物語』に近い傾向を示すことは、文体としておおむね均質な和文における、文学ジャンルによる何らかの違いが背景に存するのではないかということを感じさせる。

以上、度数分布、語彙の重なり、上位語、共通語といった量的観点から、『枕草子』の複合動詞語彙を他の作品とも比較しつつ分析した。その結果、作品の言語量という観点でおおむね説明がつき、はっきりした特徴を見出すことはできなかった。また、物語、日記、随筆といった文学ジャンルの違いも見られなかった。女性作者による平安和文作品の複合動詞は、語彙として見た場合、かなり均質性が高く、文学ジャンルによる違いを分析するには、さらに精密な分析の観点や手法を必要とする、という見通しが得られた。

三、『枕草子』に見られる特徴的な複合動詞

本節では、五作品中『枕草子』にのみ用いられる複合動詞に注目し、「作者による用語選択の意識」という観点から、四つの語例について検討する。前節の量的観点からの分析では見えてこなかった、『枕草子』の特徴の一端を摑みたい。

三・一　『枕草子』にのみ用いられる複合動詞

〈表4〉の『枕草子』の表から、対象となる複合動詞は41語あることが分かる。このうち、二例以上用いられているものは48語あり、以下に一覧する。

（5例）1語

つれたつ（連立・四）

（4例）5語

うちいだす（打出・四）、うちかづく（打被・四）、ふしをがむ（伏拝・四）、わらひののしる（笑喧・四）、ゐいる（居入・四）

（3例）9語

うちしく（打敷・四）、かきすつ（掻捨・下二）、かくれふす（隠臥・四）、ごらんじわたす（御覧渡・四）、さしいだす（差出・四）、ぬぎたる（脱垂・下二）、ひきはこふ（引・下二）、ふきわたす（葺渡・四）、よびかへす（呼返・四）

（2例）33語

あつまりく（集来・カ変）、あゆみありく（歩歩・四）、うちうたふ（打歌・四）、うちずす（打誦・サ変）、おしおこす（押起・四）、おちまどふ（落惑・四）、こひいづ（乞出・下二）、そひつく（添付・四）、たてならぶ（立並・下二）、たふれさわぐ（倒騒・四）、とびありく（飛歩・四）、とりはやす（取映・四）、にげいる（逃入・四）、ねたがりいふ（嫉言・四）、はしりうつ（走打・四）、ひかりみつ（光満・上二）、ひきたる（引垂・下二）、ひきのす（引載・下二）、ひきはる（引張・四）、ふきをる（吹折・四）、ふみちらす（踏散・四）、ふりやる（振遣・四）、ほころびたゆ（綻絶・下二）、ほめそしる（褒謗・四）、みたつ（見立・四）、みだれかかる（乱掛・四）、ゆるぎありく（揺歩・四）、よろこびまうす（喜申・四）、わけまゐる（分参・四）、わらひきようず（笑興・サ変）、わらひさわぐ（笑騒・四）、わらひにくむ（笑憎・四）、をどりありく（踊歩・四）

本稿では、用例数の多いものを中心に、「作者による用語選択の意識」がうか

がわれる語例（傍線を付したもの）について検討する。

三・二　「つれたつ」について　―日常語の可能性―

「つれたつ（連立・四）」は、東辻他（二〇〇三）によると、本稿で検討の対象とした五作品を含め、平安時代の仮名文学作品には『枕草子』以外に用例が見られない。また、構成要素の前後を入れ替えた「たちつる」も、平安時代の仮名文学作品には用例がまったく見られない(注五)。意味はおおむね現代語の「つれだつ」で理解できるものである。以下、用例を示す。

①いみじくかしこまり、地にゐし、家のこ君達をも、心ばかりこそ用意しかしこまりたれ、同じやうにつれたちてありく。（八四段「めでたきもの」113頁）

②雑色の蔵人になりたる、めでたし。去年の霜月の臨時の祭に、御琴持たりしは、人とも見えざりしに、君達とつれたちてありくは、いづこなる人ぞとおぼゆれ。（二二八段「身をかへて」270頁）

③（五節ノ舞姫ガ紫宸殿ニ）のぼる送りなどに、なやましと言ひて行かぬ人をも、のたまはせしかば、あるかぎりつれたちて、ことにも似ず、あまりこそうるさげなれ。（八六段「宮の五節いださせ給に」118頁）

④ことにきら〳〵しからぬ男の、たかきみじかき、あまたつれたちたるよりも、…（一八九段「心にくきもの」243頁）

⑤（祭ノ帰リノ行列ヲ）いつしかと待つに、御社のかたより、赤衣うち着たる者どもなどの、つれたちて来るを、…（二〇五段「見物は」251頁）

用例①②は、身分の低いものが蔵人になり、名家の子弟といっしょに肩を並べている様子を述べたものである。いずれも身分が低かったころの様子と対比的に述べられており、とくに用例①では点線（「同じやうに」）で示したように対等であることが明示されている。

用例③は、中宮が五節の舞姫の見送りに女房たち全員を行かせた、という場面である。点線部「あるかぎり」とあるように、居る人はみないっしょに行ったことが分かり、「つれたつ」人数の多少は問題にならないようである。用例④で「あまた」とあることもその傍証となる。

これらの用例を併せて考えると、「つれたつ」は、「身分に差のない複数の人間が、一かたまりになる」という意味であると言える。用例⑤も、そうした理解で問題はない。小学館『日本国語大辞典』第二版「つれだつ」の項には「いっしょに行く。伴って行く。また、いっしょに物事をする。」とあり、『枕草子』の用例①が掲出されている。語釈に「行く」や「物事をする」のような部分まで意味として含まれているが、用例からも分かるように、「つれたちて」で副詞的に機能していると思われ、「行く」「物事をする」の部分は余分であると考えるが、その他の部分は私見とも重なり問題はない。

『枕草子』以外の四作品においては、こうした場面では「うちつる（打連・下二）」や「ひきつる（引連・下二）」「かきつる（掻連・下二）」が用いられる。「うちつる」は『枕草子』『紫式部日記』に1例ずつ、『源氏物語』に8例見られる。「ひきつる」は『蜻蛉日記』『紫式部日記』に1例ずつ、『源氏物語』に14例見られる。「かきつる」は『源氏物語』に2例見られる。また、単独の「つる」が『枕草子』に1例、『源氏物語』に4例見られる。以下、用例を掲げ、「つれたつ」との相違を検討する(注六)。

【うちつる】

⑥殿上人、四位、五位こちたくうち連れ、御ともにさぶらひて並みゐたり。（枕草子、二五九段「関白殿、二月廿一日に」305頁）

⑦（頭中将ハ）里にても、わが方のしつらひまばゆくして、君の出で入り給に、うち連れきこえ給つつ、夜昼、学問をも遊びをももろともにして、をさ〳〵立ちおくれず…（源氏物語、帚木(1)33頁）

⑧法住寺の座主は馬場の御殿、へんち寺の僧都は文殿などに、うちつれたる浄

衣姿にて、ゆゑ〳〵しき唐橋どもを渡りつつ、木の間を分けてかへり入るほども、…（紫式部日記、254頁）

用例⑥は、関白藤原道隆が一切経供養を催した際の記述で、道隆の供の人々が大勢伺候している様子が述べられている。

用例⑦は、左大臣の嫡男頭中将が、光源氏に対抗していることが述べられている。常に傍を離れずいっしょに行動し、しかも何事にも引けを取らない頭中将の優秀さを述べる場面である。

用例⑧は、日記冒頭近く、藤原道長邸で出産を控える一条天皇中宮彰子のために加持祈祷を行っている記述の一部である。「うちつれたる」は小学館旧全集の口語訳、岩波新大系の脚注ともに「お揃いの」とあるが、かなり大胆な意訳であろう。ここは、浄衣を着た僧侶たちが複数人、いっしょに帰っていく様子を述べたものと捉えた方が、「うちつる」の語の理解としてはふさわしいと考える。

【ひきつる】

⑨あたらしき宮の御よろこびに、氏の上達部ひきつれて、拝したてまつりたまふ。（紫式部日記、279頁）

⑩（右近将監ノ歌）ひき連れて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂の瑞垣（源氏物語、須磨(2)18頁）

用例⑨は、藤原氏の上達部たちが、誕生したばかりの若宮を親王とする宣旨に対するお礼をみなでそろって言上する場面である。

用例⑩は、光源氏とともに須磨に下る右近将監が、昔を思い出して詠んだ嘆きの和歌である。賀茂の祭の際、みなでいっしょに葵をかざしたことをうたっている。このように、和歌に用いられる例が『源氏物語』の他動詞用法の「ひきつる」にも1例見られる。

【かきつる】

⑪（柏木ハ）祭の日などは、物見にあらそひゆく君達かき連れ来て、言ひそそのかせど、なやましげにもてなして、ながめ臥したまへり。（源氏物語、若菜下(3)368頁）

用例⑪は、源氏の妻女三宮と密通した柏木は気分がすぐれず、友人たちの誘いを断るという場面である。

【つる】

⑫（鶏ノ雛ガ）親のともにつれて、たちて走るもみなうつくし。（枕草子、一四四段「うつくしき物」195頁）

⑬月高くさしあがり、よろづの事澄める夜のやや更くるほどに、殿上人四五人ばかり連れてまゐれり。（源氏物語、松風(2)206頁）

⑭（薫ガ）夕暮れのしめやかなるに、藤侍従と連れてありくに、…（源氏物語、竹河(4)276頁）

用例⑫は、鶏の親と雛とがいっしょになって、あたりを走りまわるのがかわいらしい、と言っている。『源氏物語』にも「雁」が主語となる例が1例ある。

用例⑬は、桂にて宴会を開く光源氏の元に、冷泉帝より勅使が遣わされる場面で、点線部のごとく、人数が明示されている。

用例⑭は、冷泉院御息所の大君を意識する薫が、藤侍従と冷泉院を散策する場面である。点線部のごとく、二人で連れ立っている。

以上、「うちつる」「ひきつる」「かきつる」「つる」の用例を検討した。単独で用いられる「つる」は、主語が人間以外になる用例が見られる点で、その他の複合動詞とは異なる面がある。また、「つる」は単独で用いられるより複合動詞として用いられることの方が多いということも分かったが、「つれたつ」との意味の違いを明確にすることはできなかった。

作品単位で見ると、

『枕草子』…「つれたつ」「うちつる」「つる」

『紫式部日記』…「うちつる」「ひきつる」

『源氏物語』…「うちつる」「ひきつる」「かきつる」「つる」

のようになり、具体的な差異についてはなお検討を要するものの、接頭語により微細に表現し分ける『源氏物語』（および作者を同じくする『紫式部日記』）対「つれたつ」という他の作品には見えない複合動詞を用いる『枕草子』、という構図が見えてくる。今後、これら諸語についてさらに検討して「つれたつ」との関係を解明し、『枕草子』の複合動詞語彙の特徴の解明に結び付けていく必要がある。

「つれたつ」は、宮島他（二〇一四）によると、平安時代から鎌倉時代にかけての主要な文学作品十七作品中、『枕草子』にしか用いられていない。このことを次項以下の語例の分析と併せ考えると、「つれたつ」は当時の日常語であって、雅びな文学語彙を用いて表現しようとする『源氏物語』などの物語作品では使用が避けられた(注七)が、『枕草子』ではそうした語を抵抗なく用いた、と考えられるのではないか。すなわち『枕草子』では「作者による用語選択の意識」が弱いと考えるのである。もちろんこの考え方は現段階では仮説に過ぎず、今後の検証を要することである。

三・三　「さしいだす」「うちいだす」について
―「―いづ」から「―いだす」へ―

『枕草子』の「さしいだす（差出・四）」は、3例すべて「褥(しとね)を差し出す」という他動詞用法である。

①さて、その山作りたる日、御使に式部丞忠隆まゐりたれば、褥さし出して物など言ふに、…（八三段「職の御曹司におはします比、西の廂に」105頁）

②しばしありて、式部丞なにがし、御使にまゐりたれば、御膳やどりの北によりたる間に、褥さし出してすゑたり。（一〇〇段「淑景舎、春宮に」143頁）

③まだ褥もとり入れぬ程に、春宮の御使に周頼の少将まゐりたり。御文とり入れて、渡殿はほそき縁なれば、こなたの縁に、こと褥さし出したり。（一〇〇段「淑景舎、春宮に」143頁）

ところが、他の作品ではこのような場合「さしいづ」を用いる(注八)。

④山里びたる若人どもは、さしいらへむ言の葉もおぼえで、御褥さし出づるさまもたど〳〵し。（源氏物語、橋姫(4)316頁）

⑤御消息聞こえ給へれば、御褥さし出でて、むかしの心知れる人なるべし、出で来て、御返り聞こゆ。（源氏物語、早蕨(5)20頁）

「褥」以外に、敷物として「円座(わらふだ)」を差し出す用例もある。

⑥西の妻戸に円座さし出でて入れたてまつるに、世の人の言へばにやあらむ、なべての御さまにはあらずなまめかし。（和泉式部日記、6頁）

⑦いときよげにしなやかなる童の、えならず装束きたるぞ歩み来たる。わらふださし出でたれば、簾のもとについゐて、「（中略）」と言へば、尼君ぞいらへなどし給ふ。（源氏物語、夢浮橋(5)401頁）

そして当の『枕草子』にも、「褥」「円座」「畳」を差し出す用例がある（褥3例、円座1例、畳1例）。

⑧御使にて式部丞信経まゐりたり。例のごと、褥さし出でたるを、常よりも遠く押しやりて居たれば、…（九九段「雨のうちはへ降るころ」137頁）

⑨（深夜に訪れた男に対し）円座ばかりさし出でたれど、かたつかたの足は、下ながらあるに、…（一七四段「雪のいとたかうはあらで」220頁）

⑩左中将、まだ伊勢守ときこえし時、里におはしたりしに、端のかたなりし畳をさし出でしものは、この草子乗りて出でにけり。（跋文、349頁）

これ以外にも、挙例は略すが、本稿で対象とした五作品には「手紙、扇、袖口、土器(かはらけ)、紙燭、盃、箱の蓋、木丁、琴、車」といった大小の道具類、「手、顔、袖口」といった身体周り、はては「若君、童女」といった人間まで、幅広いものが「さしいづ」の対象語として用いられている。すなわち『枕草子』の時代、も

のを差し出す場合には「さしいづ」が用いられるのがふつうであったと考えられる。

ところが現代語では「さしだす」というのがふつうであることは周知のことがらであり、このことから、日本語の歴史上、「さしいづ」から「さしいだす」へ変化したということを知るのである。「さしいだす」という語形は、東辻他（二〇〇三）によると、『落窪物語』『宇津保物語』『後撰和歌集』『夜の寝覚』『狭衣物語』『大鏡』『讃岐典侍日記』『今昔物語集』『今鏡』『古本説話集』に用例が見られる。今後、これらの作品の用例を精査する必要がある。また、「―いづ」から「―いだす」への変化については、関（一九七七）などの先行研究もある(注九)。現段階では『枕草子』が伝統的な「さしいづ」でなく、より新しい語形である「さしいだす」を用いている事実を指摘するにとどめる。

「うちいだす（打出・四）」についても、同様の事情が存する。『枕草子』の「うちいだす」は、以下に示すように、4例すべてが特定の場面でのみ用いられている。

⑪（伊周ガ）「月も日もかはりゆけどもひさにふる、みむろの山の」といふことを、いとゆるらかにうちいだし給へる、いとをかしう覚ゆるにぞ、…（二〇段「清涼殿のうしとらのすみの」23頁）

⑫（故関白道隆ノ法事後）果てて、酒のみ、詩誦しなどするに、頭中将斉信の君の、「月秋と期して身いづくか」といふことを、うちいだし給へり。（一二八段「故殿の御ために」172頁）

⑬「あけはてぬなり。かへりなむ」とて、「露はわかれの涙なるべし」といふことを、頭中将のうちいだし給へれば、源中将ももろともにいとをかしくずんじたるに…（一五四段「故殿の御服のころ」206頁）

⑭（鶏ノ声ニ驚イタ帝ノ質問ニ対スル伊周ノ台詞）大納言殿の「声、明王のねぶりをおどろかす」といふことを、高ううちいだし給へる、めでたうをかしきに、ただ人のねぶたかりつる目もいとおほきになりぬ。（二九二段「大納言殿まゐり給て」332頁）

すなわち、「和歌や漢詩の一節を声に出す」という意味で用いられているのである。用例⑬の点線部に「ずんず（誦ず）」とあるところを見ると、「うちいだす」は声に出すまさにその瞬間に注目した複合動詞であると言える。すなわち頭中将藤原斉信の第一声を受けて、源中将源宣方もいっしょに吟詠した、と理解できるのである。用例⑭では、大納言藤原伊周が漢詩の一節を声高らかに発声したことで、周囲の眠気を打ち払ったことが記されており、これも発声の瞬間に注目していることが分かる。その他の用例も、同様に理解して不都合はない。

ところが、『枕草子』には発声を表す複合動詞として「うちいづ」も5例用いられている。

⑮五月雨の短き夜に寝覚をして、いかで人より先に聞かんと待たれて、夜ふかくうちいでたる声の、らう〳〵じう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし。（三八段「鳥は」43頁）

⑯かたはらに、よろしきをとこのいと忍びやかに、額など、立ち居のほども、心あらんと聞こえたるが、いたう思ひ入りたるけしきにて、いもねず行ふこそ、いとあはれなれ。（中略）うちいでまほしきに、…（一一五段「正月に寺にこもりたるは」157頁）

⑰後夜など果てて、すこしうち休みたる寝耳に、その寺の仏の御経を、いとあら〳〵しう、たふとくうちいで読みたるにぞ、（中略）ふとうちおどろかれて、あはれに聞こゆ。（一一五段「正月に寺にこもりたるは」158頁）

⑱下にありながら、「上に」など言はするに、これ（＝「未だ三十の期に及ばず」トイウ詩句）をうちいづれば、「まことはあり」など言ふ。（一五四段「故殿の御服のころ」209頁）

用例⑮はホトトギスの鳴き初めを聞く場面、用例⑯は寺籠りで隣の参詣人に声をかけたいが…という場面、用例⑰は寝入りばなに経を読み始める場面、用例⑱は秀句を言うことで居留守を使わず相手をする、という場面である。いずれも、

声を出すその瞬間に注目しているようである。特に用例⑮⑰に顕著である。

『枕草子』の「うちいだす」と「うちいづ」を比較すると、用例⑱のような例があり、グレーゾーンを残すものの、詩歌の一節を声に出す」場合には「うちいだす」を用い、それ以外に発声する場合には「うちいづ」を用いる、という使い分けが存するように見えるが、実際には「詩歌の一節を声に出す」場合、「うちいだす」以外に以下のような語も用いられている(注十)。

ずす　7例、うたふ　2例、

うちいふ、うちずす、くちずさむ　各1例

以上が『枕草子』の様相であるが、『源氏物語』でもほぼ同様の様相を呈する。『源氏物語』には51例の「うちいづ」が見られるが、その中には「詩歌の一節を声に出す」例は見られない。用法を大まかに整理すると、

(1)声をかける、言葉にする（22例）

(2)秘密を打ち明ける（11例）

(3)恋情を告白する（16例）

(4)賽子を振る（1例）

(5)拍子をとる（1例）

のようになる。また、『源氏物語』において「詩歌の一節を声に出す」場合に用いられる語には、以下のようなものがある(注十一)。

うちずす　10例、ずす　7例、うたふ　3例、

ひとりごつ　2例、

いひなす、いふ、うちくちすさぶ、うちのたまふ、うちのぶ、

うちひとりごつ、くちすさぶ、くちずさむ、くちなる、すさびゐる、ながむ、

以上各1例

以上をまとめると、『源氏物語』の「うちいづ」は、『枕草子』のそれとほぼ同じ様相を呈する(注十二)。しかし『枕草子』の「うちいづ」には、「うちいだす」の意味に近い用例がある（用例⑱）。そして「うちいだす」は『枕草子』以外の四作品には用いられない。このことは、『源氏物語』では「詩歌の一節を声に出す」意味では右に挙げたようなさまざまな語を用い（それぞれ、特別な発声の意味合いがある）、それ以外の発話の場合には「うちいづ」を用いる、という明確な使い分けをしているのに対し、『枕草子』ではその区別が曖昧になっていることを示すものであると考える。そしてここでも、伝統的な「うちいづ」ではなく、より新しい語形である「うちいだす」が『枕草子』では用いられていることに注目したい。

三・四　「ゐいる」について　―構成要素の順序―

「ゐいる（居入・四）」は『枕草子』に4例見られるが、それ以外の四作品をはじめ、東辻（二〇〇三）を見ても、平安時代の作品に用例を見ない、珍しい語形である。

①あからさまに来たる子ども、わらはべを、見入れらうたがりて、をかしき物とらせなどするに、ならひて、常に来つつゐ入りて、調度うちちらしぬる、いとにくし。（二五段「にくき物」35頁）

②おのづから来なども人の、簾の内に人々あまたありて物など言ふに、ゐ入りてとみにかへりげもなきを、ともなるをのこ、わらはなど、とかくさしのぞきけしき見るに、…（七一段「懸想人にて来たるは」81頁）

③物見にいそぎ出でて、いま〳〵とくるしうゐ入りて、あなたをまもらへたる心地。（一五三段「心もとなき物」201頁）

④（賀茂祭ニ車ヲ）よき所に立てんといそがせば、とく出でて待つほど、ゐ入り立ち上がりなど、暑く苦しきに困ずるほどに、…（二二〇段「よろづのことよりも」260頁）

用例①には、かわいがっている子どもがつけあがって入りびたりになることへ

の嫌悪感が記されている。用例②は、やってきた人が座り込んですぐには帰りそうにない、という場面である。用例③は、物見に出かけた際、車の中で苦しい姿勢で座り込んで待っている様子が描かれている。用例④は、祭で場所取りのために早く出かけた際に、行列が来るのが待ち遠しくて、座り込んだり立ち上がったりする、という場面である。

前項「ゐる」は「座る」意で、後項「いる」は補助動詞として「すっかり…する」意を表す。『枕草子』にも「ねいる（寝入・四）」などの例がある。したがって、「ゐいる」は全体としては「座り込む」という意味になるかと思われる。このように、語構成としては合理的に理解できるが、平安時代の作品に用例を見ないのである。その代りに、よく似た語形として構成要素の順序が入れ替わった「いりゐる」が見られる。『枕草子』の全3例を以下に掲げる。

⑤（巡回ノ靫負佐ガ）入りゐて空だきものにしみたる木丁にうちかけたる袴など、いみじうたづきなし。（四二段「にげなき物」63頁）

⑥（蟻通明神ノ由来説話）みそかに、家のうちの土をほりて、その内に屋をたてて、籠め据ゑて、行きつつ見る。人にも公にも、失せ隠れにたるよしを知らせてあり。などか、家に入りゐたらん人をば、知らでもおはせかし。うたてある世にこそ。（二二六段「社は」265頁）

⑦御簾よりはじめて、昨日かけたるなめり、御しつらひ、獅子、狛犬など、いつのほどにか入りゐけんとぞをかしき。（二五九段「関白殿、二月廿一日に」290頁）

用例⑤は、せっかく風流に薫物を施した木丁に巡回の役人が袴をかけたりして…と、その不釣り合いを嫌がっている場面である。用例⑥は、一種の姥捨て伝説で、この伝説の主人公は、それに抵抗して親を邸内に匿っているのである。「などか」以降は、それに対する作者のコメントで、いやな世の中である、と述べている。用例⑦は、関白道隆が一切経供養をした際の話で、新しい設備の素晴らしさを述べる場面である。獅子や狛犬は置物であるが、生き物であるかのように「いつの間に入ってきたのか」と面白がっている。

用例⑤⑦は「ゐいる」と同じく「座り込む」意味にとることもできるが、用例⑥はそのようには理解できない。挙例は略すが、その他の作品の用例も併せ考えると、構成要素の意味を並列的に加算して「入って、そこに居る・座る」という意味が基本となるようである。用例⑤⑦はそれで矛盾なく理解でき、用例⑥は「ゐる」の「動かない」という面に注目して「入ったままじっとしている、閉じこもっている」のように理解したい。

また、「いりゐる」は、『枕草子』以外では『落窪物語』『宇津保物語』『源氏物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『栄花物語』『堤中納言物語』『今昔物語集』『とりかへばや物語』に用いられている。すなわち、ほとんど物語作品にしか用いられず、とくに日記作品には全く用いられない（東辻（二〇〇三）による）。これは、「ゐいる」と「いりゐる」が近い意味を持っていることから、物語作品では両者の混同を避けて「いりゐる」だけを使うことにしたことを表すのではないだろうか。一方『枕草子』では用語選択の意識が弱く、「ゐいる」も用いられている、と解釈する。

以上、「作者による用語選択の意識」という考え方で説明がつく語例について考察した。この考え方は、今後さらに検証を要する。つまり「つれたつ」と「さしいだす」「うちいだす」と「ゐいる」が、いずれも「作者による用語選択の意識」という一つの原理でそのような様相を呈している、ということを裏付けなければならない。

四、おわりに

以上、本稿では平安時代十一世紀初頭に成立した『枕草子』の複合動詞につい

て、語彙として量的側面から概観し、また「作者による用語選択の意識」という観点から四つの複合動詞について検討した。

量的側面からの分析では、平安時代十一世紀初期前後の女性作者の和文作品の複合動詞は、語彙としては非常に均質性が高いことが明らかとなった。今後、文学ジャンル間のミクロな差を検出するには、別の観点を取り入れる必要がある。つまり、個々の複合動詞の詳細な分析、あるいは、複合動詞の構成要素間の意味関係に着目した分析などである。しかし、構成要素間の意味関係の枠組みについて、筆者としていまだ定見を得ていない。今後の課題としたい。

個々の複合動詞の分析では、『枕草子』の複合動詞には、『源氏物語』が何らかの理由で自らの用語として選択しなかった複合動詞が用いられていることが分かった。今後、その「何らかの理由」を解明する必要があり、表現の明快さ、日常語ゆえの卑近性など、「作者による用語選択の意識」の観点からいくつかの可能性を考えているが、具体的な検証は今後の課題である。

また、本稿では紙幅の都合で割愛したが、『枕草子』にはその言語量に比して「笑ふ」を構成要素に持つ複合動詞が多く見られるが、『源氏物語』にはこの形式がほとんど見られない。「笑ふ」という単語自体は用いられるが、複合動詞としては用いられることが少ないのである。これは、『枕草子』の成立事情とも関係して作品理解のための「鍵語」となる可能性があると考えている。

（注）

一、関一雄著『国語複合動詞の研究』笠間書院、一九七七年
　姫野昌子著『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房、一九九九年
　影山太郎編『複合動詞研究の最先端　謎の解明に向けて』ひつじ書房、二〇一三年所収の諸論文　など。

二、『枕草子』を含め、本稿で依拠する本文と索引について、以下に記す。用例に示す章段、頁などは依拠する本文のテキストによるが、通読の便宜上、私に表記を変更した箇所がある。

【枕草子】
渡辺実校注『枕草子』（新日本古典文学大系）岩波書店、一九九一年、田中重太郎著『校本枕冊子　総索引第Ⅰ部』（古典文庫）一九六九年、同『総索引第Ⅱ部』（古典文庫）一九七四年
※『校本枕冊子』は、能因本系統の伝本を主底本として校本および索引を作成しているが、三巻本系統の本文に基づく語彙索引が『総索引第Ⅱ部』に収録されているので、それを用いる。

【蜻蛉日記】
長谷川政春、今西祐一郎、伊藤博、吉岡曠校注『土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記』（新日本古典文学大系）岩波書店、一九八九年　※蜻蛉日記は今西氏が担当。
佐伯梅友、伊牟田経久編『改訂新版かげろふ日記総索引』風間書房、一九八一年

【和泉式部日記】
東節夫、塚原鉄雄、前田欣吾編『和泉式部日記総索引』武蔵野書院、一九五九年　※当該文献に本文も収録されている。
※『和泉式部日記』は、題名を「和泉式部物語」とする伝本が多く、また、文章の面からも物語的な表現が見られるなど、文学ジャンルの認定に問題を残す。また、別人の作とする説もあるが、本稿では通説に従って本人作の日記作品として扱う。

【紫式部日記】
長谷川政春、今西祐一郎、伊藤博、吉岡曠校注『土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記』（新日本古典文学大系）岩波書店、一九八九年　※紫式部日記は伊藤氏が担当。

今西祐一郎、上田英代、村上征勝編『紫式部日記語彙用例総索引』勉誠社、一九九七年

【源氏物語】

柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎校注『源氏物語　一～五』（新日本古典文学大系）岩波書店、一九九三年～一九九七年

柳井滋、室伏信助、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎編『源氏物語索引』（新日本古典文学大系別巻）岩波書店、一九九九年

※当該文献を補完する小冊子「源氏物語索引　追補一覧」も参照した。

三、分析の基礎データとなる語彙表の作成、および〈表1〉～〈表6〉の作成にあたり、テキスト処理を行うプログラミング言語ＡＷＫを活用した。コンピュータの処理能力の向上により、数行から数十行の簡単なプログラムで数千行の大量データを瞬時に集計できる。

四、東辻他（二〇〇三）により確認した。

五、『竹取物語』に「たちつらぬ（立連・下二）」が一例あるが、「立ち並ぶ」という意味であり、「つれたつ」とは意味が異なる。

大空より、人、雲に乗りて降り来て、地より五尺ばかり上がりたる程に、立ちつらねたり。（岩波新大系、69頁）

六、ただし『蜻蛉日記』の「ひきつる」一例および『源氏物語』の「ひきつる」十四例中九例は、他の「ひきつる」とは異なり他動詞用法であるので、ここでは検討対象から除外する。

七、このような考え方は関（一九九三）による。

八、『蜻蛉日記』に「さしいだす」が一例見られるが、この「さし」は「棹さす」の意味なので、本稿では別語として扱う。各作品に見られる他動詞用法の「さしいづ」の用例数は以下の通り（カッコ内は褥の類を差し出す用例数）。

『蜻蛉日記』7例、『和泉式部日記』7例（1）、『紫式部日記』4例、『源氏物語』53例（7）、『枕草子』20例（5）

九、関（一九七七）第二章第一節「複合動詞変遷上の一問題　「他動詞―出づ」から「他動詞―出だす」へ」。

十、『校本枕冊子　総索引第Ｉ部』の「と（助詞）」の項目に出てくる例文を一つずつ確認して抽出した。

十一、池田（一九八七）所収の「所引詩歌仏典」の項目を一つずつ『源氏物語』本文と突き合わせて抽出した。

十二、「うちいづ」について『和泉式部日記』の一例は用法⑶、『紫式部日記』の一例は用法⑴である。『蜻蛉日記』には「うちいづ」の用例がない。

（引用・参考文献）

・池田亀鑑『合本 源氏物語事典』東京堂出版、一九八七年

・関一雄著『国語複合動詞の研究』笠間書院、一九七七年

・関一雄著『平安時代和文語の研究』笠間書院、一九九三年

・西端幸雄、木村雅則、志甫由紀恵編『平安日記文学総合語彙索引』勉誠社、一九九六年

・東辻保和、岡野幸夫、土居裕美子、橋村勝明編『平安時代複合動詞索引』清文堂、二〇〇三年

・宮島達夫、鈴木泰、石井久雄、安部清哉編『日本古典対照分類語彙表』笠間書院、二〇一四年